



Innovation for the Rotary club ロータリーに新風を 2014 年 1 月のロータリーレポートは 1 ドル = 102 円

パストガバナーからの手紙

163 回

炭谷 亮一

「731 部隊」出身の教授と千葉大チフス事件

今から約 40 数年前、当時私は歯科大の 3 年の新学期を迎え様としていた。ある日親しい友人が私に話しかけて来た。「オイ炭谷、今学期から始まる細菌学の教授は戦前満州で細菌兵器開発の為に外国人捕虜をモルモット代わりに人体実験した、恐ろしい冷血人間だ!!」。「その証拠は」と図書館から持ち出した昭和 20 年代出版の古ボケタ本の茶色に変色したページをさし示した。

そこには、731 部隊の腸内細菌（赤痢、コレラ、腸チフス等）の研究に従事していた H 医師は、現在は某歯科大学の細菌学教授であると書かれていた（ちなみに 731 部隊の非人道的行為を我々日本人に白日の下に晒した森村誠一著“悪魔の飽食”は約 10 年後の昭和 56 年出版）。友人は続けて、期末試験は大変難しく、なかなかパスさせてもらえない、通常は追々試験まで覚悟した方がいいと忠告してくれた。（事実友人と私 2 人供、追々試験まで受けさせられ、ご丁寧に卒業試験でも追々試験と苦労させられた、いや良く勉強させていただいたと言った方が適切かな?）。H 教授の講義はいつも、苦虫をつぶした様な顔で自信たっぷりの様感じた（当時の医学生物学の学生のテキストとして一番良く使用された“新戸田細菌学”の腸内細菌の分野を分担執筆しており、そこそこ権威であったのだろう）。講義が約 2 ヶ月半経過し、細菌による感染、発生論になると、とたんに上機嫌で目を輝かせ、にこやかな話しぶりに大変身したのに驚かされた。上記の親友の言葉を思い出し、鈍い私でもピンと来るものがあった。

講義中に H 教授自ら以下の様に語り出した。「私は戦前満州にいたことがあり、我々細菌学を志す者にとっては満州は細菌の宝庫だ」と満面の笑みを浮かべて話していた。私自身、広い中国の中でなぜ満州だけが細菌の宝庫なのか？実は質問したかったのだが、H 教授の機嫌を損ねて単位がもらえなかったらとの思いが頭をよぎり、思いとどまった。今考えて見ると多分満州での生活環境が、当時極度に劣悪、不潔だったのではないだろうか。その時の H 教授の講義は乗りに乗っていた。細菌による感染・発生させるには十分な細菌量が必要であると力説していた。腸内細菌（赤痢・コレラ・腸チフス等）による感染・発症は患者、保菌者および排泄物で汚染された飲食物、とくに爆発的な伝染病の流行は井戸水、水道水に原因することが多いとニヒルな笑みを浮かべて語った。

2013 ~ 14 理事・役員 委員会 ★太字：理事役員

（役員） 会長：野城勲 エルト：宮永満祐美 副会長：若狭豊 副会長：魏賢任 幹事：上杉輝子 副幹事：井口千夏
会計：東海林也令子 SAA：武藤清秀 直前会長 北山吉明

（理事） クラブ管理運営委員長：西村邦雄 副：二木秀樹 親睦：○二木秀樹 金沂秀 村田祐一 杵屋喜三以満
井口千夏 プログラム：○魏賢任 木場紀子 谷伊津子 武藤清秀 SAA：○武藤清秀 大路孝之 川きみよ
ニコニコ：○江守巧 東海林也令子 土田初子 友好・クラブ細則：○水野陽子 宮永満祐美 岩倉舟伊智

奉仕プロジェクト委員長：木場紀子 副：水野陽子 職業：○永原源八郎 竹田敬一郎 社会：○谷伊津子
辰己クミ 大沼俊昭 国際：○川きみよ 江守道子 井口千夏 東海林也令子

喫煙問題：村田祐一 会員組織委員長：金沂秀 副：辰己クミ 会員増強修練：○藤間勘菊 石丸幹夫
炭谷亮一 金沂秀 魏賢任 ロータリー財団委員長：藤間勘菊 副：永原源八郎 ロータリー財団・米山寄付：
○木場紀子 藤間勘菊 川きみよ 大路孝之 年次寄付：野城勲 広報委員会委員長：村田祐一 副：江守道子

広報：○杵屋喜三以満 相良光貞 宍戸紀文 ロータリー情報：○若狭豊 竹田敬一郎 山崎正美 会報ホームページ：○石丸幹夫 宍戸紀文 稲山訓央 常任理事：石丸幹夫 吉田昭生

理事会オブザーバー・アドバイザー：パストガバナー炭谷亮一 地区パスト幹事 岩倉舟伊智
長期姉妹クラブ担当 南光州：金 石丸 岩倉 江守巧 東京世田谷中央：炭谷 岩倉 石丸 藤間

京都北東：炭谷 杵屋 水野 高崎：石丸 村田 金沂秀 藤間 宮永

例会場 ホテル日航金沢 5F 〒920-0853 金沢市本町 2-15-1 T076-234-1111 例会日時 木曜日 19：00

事務室 ライブ 1 ビル 2F 〒920-0852 金沢市此花町 3-2 T076-262-2211 F076-262-2241 (事務局) 村木早苗

E-mail khrc@quartz.ocn.ne.jp ホームページ URL http://www17.ocn.ne.jp/~hrc/

事務局執務時間 月火水金 9：00 ~ 15：00 休憩時間 12：00 ~ 13：00 木 15:00 ~ 20:00

休日 (土日祝日) 幹事 上杉輝子

さて、H 教授は当時日本社会を騒がせていた有名な「千葉大チフス事件」に言及した（昭和 41 年 4 月に千葉大医学部の鈴木充医師が、食べ物や飲料にチフス菌を混入させ、彼の関係した静岡や千葉で 100 人以上の腸チフス患者を発生させたとして、傷害罪で逮捕、起訴された。その後昭和 47 年、米国の刑務所で行った人体実験において、鈴木医師の供述方法では腸チフス患者は発生しないと言う科学鑑定を証拠採用し、一審は無罪となったが、昭和 51 年の二審は一審判決を破棄し、懲役 6 年の有罪となり、更に最高裁への上告は棄却され、6 年服役した後、昭和 58 年医道審議会は鈴木医師の免許を取り消した）。そして H 教授は新聞報道による鈴木医師の自供した方法では、腸チフスを発生させることは不可能だと断言していた（自身の満州で行った人体実験により熟知、確信していたのである）。

当時の医学界で腸内細菌の権威的存在として当然、検察弁護側のいずれか、もしくは双方から意見を求められ、人体実験の有用性をサジェスションしたと容易に推測出来る。二審判決は千葉と静岡での患者から検出された腸チフス菌がいずれも D2 型菌で、同じ性質を持ったチフス菌だったことである。千葉と静岡の集団発生がもし別個に発生したものならば、菌の型や性質が同一である可能性はほとんどないと考えられ、鈴木医師の犯行の可能性が高いと判断され、更には被告の自白には一貫性があり信用出来るとされた（但し被告は一審で自白を翻し無罪を主張）。犯行動機は被告の性格異常に加え、医局に対する潜在的不満があったとした。私には状況証拠を寄せ集めれば鈴木医師の犯行と思われるが、日本の裁判の証拠主義から言って妥当な判決と言えるかどうか、甚だ疑問である。

クラブ例会予定 2013-2014 年度

- 1/23 前田直大様（前田土佐守記念館館長）
- 1/30 木下孝治様（EMソング代表取締役）
- 2/6 平尾祐紀子様（ハーブ奏者）コンサート
- 2/13 未定
- 2/20 高木真理子様（子ども夢フォーラム代表）
- 2/27 穴倉玉日様（泉鏡花記念館学芸員）



例会優り

第 728 回例会

ホテル日航 SF

1/23 (木) 19:00
 例会出席率 18/36 50.00 %
 12 月修正出席率 75.99%

点 鐘

ロータリーソング『ROTARY』

四つのテスト

会長 挨拶： この一週間、私自身とても早く感じております。

官庁関係では年度末に入り、物品需要費の発注時期に入っていることもありますが、公私共に慌ただしく、これと言ってないのですが、ただただ時間が過ぎるばかりです。



私が平成 9 年に大阪で研修を受けまして、終了時に「心の日めくり」カレンダーを頂きました。1 ヶ月 31 日の言葉のカレンダーです。今日はその中の一つを自分に言い聞かせる意味でご紹介いたします。

「挑戦」・・・この世には二つに一つの選択しかない。

あきらめて生きるか、挑戦しつづけて生きるか。あきらめて生きている人があまりにも多い。自分に妥協し、自分を偽り、他人のせいにし、言い訳を言い続け、弱音をはいて、あわれみを乞い、人生を生きている。

あきらめ・・・何と安易な言葉だろう。挑戦こそが人生だ。困難にあえて挑戦し、困難を乗り越え、自分らしく生きる、挑戦するから命が燃える。挑戦するから魂が生きる挑戦こそが新しい道を切り開く自分自身に言い聞かせる言葉です。

ゲスト紹介（卓話者）前田土佐守記念館館長 前田 直大 様 令夫人圭子 様

ビジター：（会員ご家族）石丸 恭子 様

皆出席者顕彰：3 ヶ年 野城勲会員 川きみよ会員（入会より）2 ヶ年 北山吉明会員

《 食 事 》



幹事報告・委員会報告

上杉輝子幹事： 2 / 3 (月) の香林坊 RC の夜間例会は、創立 26 周年例会でビジターお断りということ。メーキャップされる方はご注意ください。



ニコニコBOX

¥6,000- 本年度 ¥479,100- 残高 ¥5,247,407

野城会長：前田直大様、令夫人圭子様、本日のお話楽しみにしております。宜しく願いいたします。石丸会員：本日の講話に前田直大様をお迎えして。上杉幹事：前田様、奥様圭子様、ようこそいらっしゃいませ。本日お話楽しみにしております。炭谷会員：前田様、今夜はようこそ。卓話楽しみにしております。



講話の時間

『 利家と三人の天下人達 』

前田土佐守記念館 館長 前田 直大 様

紹介：前田直大先生は現在は内科の先生ですが、初代は利家とまつの次男利正で七尾小丸山城主 26 万石です。石丸幹夫

プロフィール 氏名 前田 直大 生年月日 昭和 28 年 2 月 12 日
 昭和 47 年 3 月 石川県立泉ヶ丘高等学校卒業 48 年 4 月 金沢医科大学入学 54 年 3 月 同大学卒業
 (以後同大学で 2 年間研修) 56 年 4 月 同大学呼吸器内科入局 平成 4 年 10 月 医療法人社団 浅ノ川
 理事就任 8 年 3 月 田中町温泉ケアセンター施設長 18 年 4 月 前田土佐守家資料館館長(兼務)

19年 5月 公益財団法人 成巽閣 評議員就任 22年 4月 尾山神社 責任役員就任
平成 2年 4月 内科認定医取得 3年 6月 金沢医科大学医学博士取得

講話：「利家と三人の天下人達」 田中町温泉ケアセンター 施設長 前田直大



本日は卓話をする事に成りましたが、立派な方がたの前で恐縮しています。利家の時代の天下人の人間関係から申し上げます。

先ず、前田利家と三人の天下人達（織田信長、豊臣秀吉、徳川家康）の関係を考えてみたいと思います。ほぼ同じに生まれ活躍し、それぞれの立場で協力し合い敵対しながらこの戦国時代を過ごしたからです。

天文三年（1534）織田信長が信秀の長男として誕生

天文六年（1537）豊臣秀吉が弥右衛門の長男、前田利家は利春の四男として誕生

天文十一年（1542）徳川家康が松平広忠の長男として誕生

織田信長は祖先が越前国丹生郡織田の荘の荘官で先祖は藤原氏といわれています。信長自身も天文十八年（1549）まで藤原信長と自称する様になったと言います。

14世紀末に越前守護の斯波氏が尾張の守護を兼任し織田氏も尾張にきました。しかし、その後、応仁の乱の際に斯波氏の家督争いが起こり、織田家も分裂し、とりわけ信長の父である織田弾正忠信秀は主家の大和守をしのぐ勢いとなりました。信秀が死ぬと清州城主織田大和守広信が襲ってきますが、信長は清州城を攻め広信を討ち取り清州城のうつりしました。ここで、信長と家康との関わりについて述べます。

天文十六年（1547）織田信秀が岡崎城に迫り、松平広忠は今川に援軍を求めましたが、家康は人質として今川の駿河に送られる途中、家臣の裏切りで織田方へ連行されました。

天文十八年（1549）松平広忠が没し、今川義元は三河を支配します。織田の安詳城が陥落し、織田信秀は今川と和睦し、家康を今川にかえます。従って信長と家康がお互いを知り合うのはこの二年間の事となります。

以後、永禄三年（1560）桶狭間の戦いで義元が信長に打ち取られるまで、家康は八才から十九才まで人質ですが、これは四人の様な惨めな生活を連想しがちですが、家康の駿府での生活は義元の師であり名軍師でもある太原崇孚に教養を受け、能や連歌など武家としての教養を今川家で身につけます。夫人は今川義元の妹の子の瀬名姫です。瀬名姫は年も家康より六歳年上の二十一歳で家康は今川一門の扱いを受けています。二人は駿府に新居を建て結婚三年目の永禄二年 1559 に長男信康、その翌年長女亀姫が誕生しました。ところが永禄三年に桶狭間の戦いにより義元が信長によって敗死しました。そこで家康は同年岡崎城に戻り元康の名を捨て家康とし、信長と清洲同盟を結びます。しかも家康は妻子を岡崎城に残して自分は浜松城へ移り、稀にしか岡崎城を訪れなかった事で築山殿は家康を恨み嫁と姑の間も不仲となりました。やがて、築山殿は武田勝頼と通じ家康と信長の暗殺を謀りますが、手紙が徳姫に漏れ徳姫が父の信長に通報したため信長は家康に信康には切腹、築山殿には斬罪を厳命したのです。

私はむしろ家康より築山殿の方に同情しますが皆様方は如何でしょうか。

信長は緊迫した状況の中で冷静に周囲の人間達を観察していたのでは無いでしょうか。家康は信長と自分の置かれた状況を鑑みて信長の冷徹な人間性に触れ、共感すると共に畏怖の念を持ったのでは無いかと思います。それゆえ、家康は信長に対して最後まで従順であった理由ではないかと私は思います。

信長と利家との関わりについて述べます。

天文六年 1537 に前田利家（幼名は犬千代）は荒子城主縫殿利春（利昌）の四男として尾張愛知郡荒子村に生まれました。利春は五千石で主君は信長の父の信秀です。夫人のまつは天文十六年（1547）に尾張海東郡沖之島で信長の家臣篠原主計の娘として生まれています。信長の父が病没してから利家は信長の小姓になります。信長が清洲に移ってからは信長のわがままにこりて、弘治二年稲生の戦いが起こり、林美作守や柴田勝家が信行を要して反乱をおこした。利家は宮井勘兵衛の矢で右目を怪我したが討ち取りました。生母の土田御前の哀願で信行と勝家を誓詞を撰ってゆるしました。利家は今戦いで三百十五石になります。そして村井永頼をかかえます。以後一生を前田家のために捧げた功臣となりました。

その後信行は信長の闇討ちを画策したため、柴田勝家は信長に告げます。信長は仮病を使って信行をおびき寄せ清洲城に入ったところを池田勝三郎に刺殺させます。この事件により勝家は信長の家臣となりました。

さて、信長の「大かぶきものうつけ」について紹介しましたが「利家様御若き時はかぶき御人なかなかそこつ人様にて喧嘩好きをも成され、その時の事にて候えば御持鑓さへ又左衛門鑓と人達きより見付けはへ又左衛門くる由にて、皆人へり申候様にけんなる御こしらへの由に御座候」と評されている事からよく似た気風を持つ主従であったと思います。

利家は身長は六尺（約 181cm）を超えていたと推測されていますが、果たしてそうなのでしょう。利家の使用した脚絆が現在残されており脛骨の長さおよそ 35cm 位と思われます。推定式があり、それに当てはめてみますといずれも 165 ～ 167cm 位となります。また、当時の長槍は 3.6 m でしたが、織田軍は三間半（6.3m）のを採用しており「槍の又左」と称された利家が高下駄を履き、長槍を振り回しながら往来を闊歩していて、周囲の人達はさぞかし偉丈夫に見えたのでは無いかと思われそのことが大男と誤解されたのではないかと思います。

利家と秀吉との関わりについて述べます。

媒酌人は秀吉とねねと言う説もありますが、秀吉は永禄三年（1560）に小物頭として桶狭間の戦いに従軍していることから身分の低い秀吉に利家が媒酌人を頼むことはあり得ません。秀吉とねねが結婚するのは永禄四年（1561）

でありこの説は眉唾物と思われる。永禄二年 1559 に信長は岩倉城を陥落し、尾張国を統一しました。利家は刀のさやにさす筈（こうがい）を盗んだ犯人を一旦は許したものの陰口をたたかれたため、信長にこの犯人の拾阿弥成敗の許可を願い出ましたが許されませんでした。その後も拾阿弥の態度は一向に改まらなかったため、利家は信長が見ている前で拾阿弥を斬殺しました。

そのため信長は立腹し利家に死罪を申し付けますが、柴田勝家の助命嘆願により到仕の処分となりました。浪人になった利家はすさんだ生活に陥り、堪りかねた村井長頼が柴田勝家と烏帽子親の津田信家の所へ相談に行きます。熱田神宮の社家の松岡家へいきます。それによりまっは幸と村井を連れ荒子へ帰ります。ところで、利家が松岡家に寄食していた時、身の回りの世話をした乙福に男児が出来、松岡家を継ぐぐ事になりました。慶応時代、経済的に困窮していた松岡家が加賀藩に書状を送り援助を求め、加賀藩はその真偽は不詳としながらも、両家との関係がある事は認め年間三十俵の米をおくりました当時の織田家では兵農分離を進めており、家中の領民達は長男が家督を継ぎ残りの男子は家を出て兵役に就いていたため、利春にしてみれば四男坊が道を誤ったとしても前田家が存続するのであれば利家の事はそれ程気に留めていなかったと思います。

また同じ年に桶狭間の合戦が起こり、利家はこの合戦でひそかに参加し、一番首を捧げましたが信長は顔をそむけて言葉もかけなかったため首を田んぼに投げ捨て再び戦場に向かいました。利家は負傷しながら再び首級を挙げて捧げましたが、又もや信長から声を掛けられなかったため、利家はもう一度戦場に向かおうとしました。

その行動を見ていた御前衆が信長に進言したため信長は利家を押し留めるように指示しましたが、利家の再仕官とはなりません。なお一番首は一番槍と同様に戦場における武功の象徴として高く評価されており、たとえ一番槍で討死したとしてもその子孫が重く取り立てられます。従って、常軌ま奉公の常道ともいえるもので戦場では味方の勝利よりも自身の槍働が優先されました。美濃随一と噂の高い「首取り足達」の異名をとる足達六兵衛ブ討ち取ってからはようやく信長の勘気が解かれることとなります。信長は利家の復帰を許し赤母衣衆に抜擢し、新たに三百貫を加増し利家は四百五十貫の知行となりました。母衣衆とは戦場で本陣と各部将との連絡に当たり、信長は黒母衣衆・赤母衣衆各十人を任命しており、利家は赤母衣衆の筆頭として重用されることとなりました。

さてねねは愛智郡朝日村の杉原定利の次女で信長の足軽頭の浅野長勝の養女で、秀吉はねねの実家の本家木下の生を貰い木下藤吉郎となります。その際、利家とまっは媒酌人となったといわれます。私はこの説は真実味があると思います。何故なら秀吉は墨侯の合戦以降は順調に出世しやがて利家を追い越して行きますが、この頃は利家の方が武将として位が上であり、今回の事件でも運の強い男として秀吉の眼に映った事、両者の身分の差も余り違わず媒酌人として頼み易かった事、さらに年の近いまっとねねが親しかった事から利家と秀吉は急速に近づいて行ったのではないかと思います。利家とまっは後に子の無い秀吉夫婦に養女を出しますが、これも最初は夫人同士が仲の良かった事が契機だったと思われる。ところで、利家は織田家から致任されたことで周囲の見る目が変わった事に自身が気づいた筈です。、十五歳で信長に仕えた利家にとって信長は独断専行の人であっても、恐らく利家にとってはヒーローであり主君と呼べる方は信長しかいなかったのでは無いかと思います。信長のこの処断も比較的軽いと思います。

信長はどのような仕打ちを受けても自分だけを信じて従い、付いてくる者を見極めたかった思うのです。織田家から致仕された事は利家にとって現実社会を見つめ直し人情の機微について考える良い機会となり、人物の器量を上げることになったと思います。織田家の他の家臣たちが秀吉の力量を認めなかったのに対して利家はこの事件により秀吉に従う事が出来たと私には思えるのです。

会員消息

北国新聞 2014.1.28 (木)

上杉廉君 (上杉輝子会員のお孫さんで東海林也令子会員のピアノ教室) が銅賞に

永禄四年 (1561) に織田家への帰参が叶った利家のその後について話を進めたいと思います。利家はまっと幸を荒子から呼び寄せ再び清州の城下に住むことになりました。

永禄五年 (1562) には嫡男利長が翌六年には次女のしょうが生まれ、まっは三人の子の母親となります。信長は稲葉城を居城とし、この土地を岐阜としました。妹のお市を興入れさせることで浅井家との同盟を成立させました。永禄十一年 (1568) に足利義昭は越前朝倉義兵の許から岐阜城に入り、正親町 (おおぎまち) 天皇から綸旨を得て上洛の途に就きます。

その上洛の前途に立ちふさがる六角承禎の箕作城攻める先陣に秀吉がつくことになりましたが、赤母衣衆の使い番として向かった利家は秀吉の制止を振り切り城門に突進し戦端が開かれてしまいます。利家は一番首を上げ信長からは激賞されますが秀吉は面目が丸つぶれ激怒しました。この様に墨侯で戦功を挙げ美濃攻めでも調略を持って一国を手に入れた指揮官である部将の秀吉は、信長直属で豪勇の武将である利家よりはるかに地位が上昇していました。 -----

点 鐘

